公民科教育教材としての『論語』

坂内栄夫

はじめに

孔子（-551～-479）、名は丘、字は仲尼。現在の山東省の付け根、当時の国名では魯の人である。曲阜に学園を開き、そこで門人との問答を輯録した『論語』が今に伝わっていること、周知の事実であろう。以下、『論語』[1]を題材に「倫理」の授業を行う際に、『高等学校学習指導要領』「倫理」にいう「自己の生きる課題とのかかわりにおいて、先哲の基本的な考え方を手掛かりとして、人間の存在や価値について思索を深めさせる」事について留意し、また「倫理」の授業として『論語』の思想内容を「倫理的な観点が明確に」なるように取り上げる。その為には公民科教育教材として『論語』の、どのような内容を、どのように授業を行うのが適切か、どの点に注意して授業を行うのがよいのか等について検討することにしたい。まず、孔子は教育者であったので、どのように教育を行ったのかについて概観し、その後で孔子の思想について見る事にしよう[2]。

【孔子の教育について】

○孔子学園の教育目標

孔子は若い時と諸国放浪から帰った後、晩年に学園を開いて子弟を教育した。『論語』にはこの学園での教育目標、とでも言うべきものが伝わっている。それが、所謂る「徳行・言語・政事・文学」の「孔門四科」である[3]。

> 徳行は、顔淵・閔子騫・冉伯牛・仲弓。言語は宰我・子貢。政事は冉有・季路。文学は子游・子夏。
>
> 徳行。顔淵。閔子騫。冉伯牛。仲弓。言語。宰我。子貢。政事。冉有。季路。文学。子游。子夏。「先進」十一－三

ここに言う「徳行」とは、人間として立派な行為ができる事、つまり道徳的実践。それに秀でていた弟子が顔淵・閔子騫・冉伯牛・仲弓の四人であった。次に「言語」とは、的確優美な言語表現。例えば外交交渉でのさわやかな弁舌などである。それには宰我・子貢が秀でていた。「政事」とはこの場合、官吏として政務ができる事、実務ができる意である。それには冉有と季路。最後の「文学」とは、今の意味とは異なって、学識・経験で裏付けできる事、いわば教養や学問があること。それは、子游・子夏が一番であった。

ここに言う四つの科目が、孔子の学園の教育目標であり、教育の科目であったと考えられている。そして、これに加えて（1）儀容と奏楽（礼楽文化の教養）と、（2）詩書など古典の理解、という士人としてのふさわしい人格の完成を目指す教育を行っていた様である。士人とは支配階級の最下層、孔子が属していた階層で実際に実務を行って政事をする階

層である。つまり、孔子は実際に政務を行う事のできる士人を育てようと考えていたのである。

○個性に合った教育

孔子は子弟を教育するにあたって、各人の個性に合った教育を施していたようである。以下の言葉は、孔子が弟子の個性をよく見抜いていたことを示している。

高柴は愚直であり、曾参は魯直であり、子張は奇矯に過ぎ、子路はやんちゃである。先生が言われた、顔淵は理想に近いね。（でも）よく窮乏する。子貢は（天命に安んじないで）金儲けをして、予想した事はよく当たる。
柴也愚。参也魯。師也辟。由也喭。子曰。回也其庶乎。屢空。賜不受命。而貨殖焉。億則屢中。「先進」十一ー十八

また、個性を見抜いて教育したことは、弟子の同一の質問に対しても、孔子の解答が異なっている例が屢々見える事に現われている。

子路が質問した。「聞いたら、すぐ実行にうつすべきでしょうか。」先生「父兄がおいでになるのに、どうしてまた聞いてすぐにそれを行えよう。」
冉有が質問した。「聞いたら、すぐ実行にうつすべきでしょうか。」先生「聞いたら、すぐ実行するがよい。」
後日、公西華が言った。「先生は、由(子路)が『聞いたら、すぐ実行にうつすべきでしょうか』と尋ねた時には、『父兄がおいでになる』と言われたのに、求(冉有)が『聞いたら、すぐ実行にうつすべきでしょうか』と尋ねた時には、『すぐ実行せよ』と言われました。私（公西華）は、迷っています。そこで敢えて（先生の真意を）お尋ねします。
先生「求（冉有）はとかく消極的だから、それを励ましてやったのだが、由（子路）はとかく出しゃばりだから、それをおさえたのだ。」
子路問。聞斯行諸。子曰。有父兄在。如之何其聞斯行之。冉有問。聞斯行諸。子曰。聞斯行之。公西華曰。由也問聞斯行諸。子曰。有父兄在。求也問聞斯行諸。子曰。聞斯行之。赤也惑。敢問。子曰。求也退。故進之。由也兼人。故退之。「先進」十一ー二十二

積極的な弟子に対しては走りすぎるのを抑え、消極的な者には背中を押してやる。孔子が弟子の個性に応じて教育を行っていた様が、鮮やかに示されている。また、後に述べる「仁」について質問した、樊遅と顔淵への返答の相違も参照の事。なお、「問仁」問答の場合は、弟子の性格の相違に対応した解答ではなく、理解能力の上下により、個人の能力の程度に応じた解答となっているのが現われている。

○啓発的教育法

『論語』の中で孔子は、門人との問答を行う場合多くは門人の質問を受けた後、孔子から更に質問を行ったりして相手の発現を引き出すことに努めているように見える。これは、本人の問題意識の成熟を待って教えるという、啓発的教育法と言えるものである。典型的な例として、以下の発言を見られたい。

先生が言われた。「(何か疑問を持ち、その為に心が）ふくれあがる様でなければ、啓き導かない。(何か言いたくて仕方がないけれど、）上手く言えないというくらいでなければ、発き導かない。一つの隅だけを挙げて示せば、あとの三つの隅も連鎖的に理解してこちらに応答するというのでなければ、繰り返す事はしない。」

子曰。不憤不啓。不悱不発。挙一偶不以三隅反。則不復也。「述而」七ー八

相手の質問が成熟し、どうしても問わずにはいられないという状況になって初めて教えるという。その際も、全てを教えるのではなく、一部を示して残された部分は質問者自身で類推して理解できる様でなければ、質問自体がまだ成熟していないので、相手の成熟を待つという。相手の自発的欲求に期待するという、「徳治」(相手の人格的な魅力に感化され、自分自身が相手のようになりたいと自発的に希求するのが「徳」である。つまり、あくまでも、相手の自発的行動、意思が前提になるという点は、教育法と同じであろう。)を主張する儒家らしい教育法と言える。

そして、このような教育法を実践できるのも、教育する相手が下級とは言え、支配社会層の下層集団である士人相手の教育であるからだと言える。彼らは、支配者としては下層であるが、全人民から見れば、読み書きのできる少数エリート集団の一員であると言える。そのような選ばれた集団相手の教育の故に、相手の自発的意思を待つという教育法が成立するのであろう。

なお、最初の述べた通り、当時の社会は血縁関係が全ての社会構造の原理となっている、血縁社会であった。その中で、孔子の学園の人間集団は朋友集団といわれ、血縁関係とは無縁な、非血縁集団であったとされる。これは当時としては異例の集団であり、極めて珍しい集団であった。このような集団を組織し、教育を行おうと意図した点に、孔子学園の先進性を伺う事ができる。

次に、『論語』の授業を行う時に、倫理的観点を明確にするため、『論語』に見える思想の中から、「黄金律」「仁」「政治思想」「宗教思想」の四点に焦点を絞って取り上げる。これらは倫理的視点からは「黄金律」「愛」「徳」「知」に相当する。以下、これらの点について見ていくことにする。

【孔子の思想】

○黄金律

倫理学の命題に、黄金律と呼ばれるものがある。有名な例として、『新約聖書』の「山上の垂訓」と言われる、次のような言葉がある。

「人にしてもらいたいと思うことは何でも、あなたがたも人にしなさい」

(『マタイによる福音書』7ー12、『ルカによる福音書』6ー31)。

この考えは、人間関係の基本・土台であり、他人も自分と同じである、同じ価値を持つという事を前提に人間関係を構築していく必要があると言う事を述べるものである。従って、世界中の多くの宗教・道徳・哲学にも同じ「黄金律」という考え方を見る事ができる。そして、今ここで見ている『論語』にも黄金律は述べられている。

仲弓が仁について質問した。先生は言われた。「家を出て人を迎える時には、大切な客にに会うかのようにして、人民を使役する時には、大切な祭を行うかのようにする。自分が望まない事

は、他人にしないようにする。そうであれば、国にあっても人に恨まれることがなく、家庭にいても人から恨まれることはない。」仲弓は言った。「私は愚鈍な人物ではありますが、この言葉を実践させて頂きたいと思います。」

仲弓問仁。子曰。出門如見大賓。使民如承大祭。己所不欲。勿施於人。在邦無怨。在家無怨。仲弓曰。雍雖不敏。請事斯語矣。「顔淵」十二ー二

子貢が質問した。「一言だけで、一生行えるようなものはありますか。」先生は答えられた。「まあ「恕」かな。自分が望まない事は、他人にもしないようにするということだ。」

子貢問曰。有一言而可以終身行之者乎。子曰。其恕乎。己所不欲。勿施於人。「衛霊公」十五ー二十四

ここで「己の欲せざる所、人に施すことな勿かれ。」というのが倫理学で言う「黄金律」にあたる言葉である。「黄金律」とは始めに見たとおり、人間関係の基本・土台である。「他人も自分と同じである、同じ価値を持つ」という事を前提に人間関係を構築していく必要があると言う、『新訳聖書』の「山上の垂訓」と同じ事を述べているのである。

黄金律は、聖書に限らずユダヤ教・ヒンズー教・イスラム教など、世界中の多くの宗教・道徳・哲学で見られる考え方である。それは黄金律が、人間関係の基本・土台であるからである。このような普遍的な考え方が、古く紀元前の資料である『論語』にも見られるのである。「黄金律」の存在を強調すると倶に、『論語』の思想の普遍性、延いては古典の古典たる所以も強調すべきであろう。

○仁

「仁」とは『説文』に「仁は親（したしむ）なり」とあるように、親愛・慈愛を意味する語である。『論語』では、次の問答が「仁」の意味を端的に示しているだろう。

樊遅が仁について質問した。先生は言われた。「人を愛することである」。知について質問した。先生は答えられた。「人を知ることである。」。樊遅は意味が分からなかった。先生が言われた。「正しい人を取り立てて、邪な人の上に置けば、邪な人も正しくすることができる。」……

樊遅問仁。子曰。愛人。問知。子曰。知人。樊遅未達。子曰。挙直錯諸枉。能使枉者直。……「顔淵」十二ー二十二

次の言葉も、「広く愛する」ことが「仁」であるとの方向の発言である。

先生が言われた。「若者よ、家庭では孝行、外では年長者に悌順に仕え、（言行を）慎んで誠実さを守り、誰でも広く愛して、仁に親しめ。このようにして余裕があれば、そこで初めて書物を学ぶとよい。」

子曰。弟子入則孝。出則弟。謹而信。汎愛衆。而親仁。行有餘力。則以学文。「学而」一ー六

このように、孔子の言う「仁」とは、「愛する」という方向を意味する言葉なのである。ただし、孔子の「仁」は、墨子の「兼愛」とは異なって、博愛ではない。親疎尊卑の区別が存在する。差別的な愛である。故に後に墨子が「別愛」と批判したのである。弟子の有若の語であるが、「仁」が肉親への愛情から始まることについて次の様に述べている。

有子が言った。「その人柄が孝行悌順でありながら、目上に逆らうことを好むようなものはほとんどいない。目上に逆らうことを好まないのに、乱を起こすことを好むような者は、滅多にいない。君子は根本のことに努力する。根本が定まってはじめて〔進むべき〕道もはっきりする。孝と悌ということこそ仁の根本であろう。」

有子曰。其為人也孝弟。而好犯上者。鮮矣。不好犯上。而好作乱者。未之有也。君子務本。本立而道生。孝弟也者。其為仁之本与。「学而」一ー二

つまり、「孝悌」が「仁の本」なのである。「仁」の手始めは身近な「孝悌」にあるので、肉親への愛情から徐々に外に広げていって、他人に及ぼしていく。このようなものが「仁」という愛情なのである。

なお、このような仁が肉親への愛情から始まる事については、当時、周王朝の封建制の制度を前提にしていると考えられる。孔子の生きた周の時代は、血縁により分封する社会であり、それは国も諸侯の家臣も同様であった。つまり、血縁の原理で社会秩序が決定されている社会であったのである。孔子の肉親から始まり、親疎の存在する愛情である「仁」は、このような血縁の原理で構成されている社会構造と対応していると考えられる。

以上のような「仁」について教える場合には、「仁」は従来の倫理学上の視点で捉えると「愛」に相当するが、「仁」が決して博愛ではなく、血縁の濃淡による親疎の区別のある愛情であることに留意しなければならない。そのため、後になって兼愛主義者の墨子から、「別愛」（差別愛）であると非難されたのである。また、「仁」に血縁による親疎が存在する事は、当時の周代封建制社会が、血縁関係の原理で構成されていた事と対応している点にも言及できると尚更よいと思われる。孔子と雖も当時の社会原理と無縁にはいられなかった、影響を受けずにはいられなかったという事が示されていると思われる。

○政治思想

儒家の政治思想の特徴は、国家と家族を同一構造、連続でとらえる。同じ性質として捉える点である。即ち、家族の団結平和は、家長の「道徳人情」による。すると、国家の平和・安定も同じように、君主の「徳」によるという様に捉えるのである。つまり、君主は人間の中で最も聡明な人物であるから、君主の「徳」により生活をよくするのである。「徳」とは人格的感化力と定義でき、「あのようになりたい」と慕い望ませる力である。このような感化力により、各人の行動を自ら律しさせ家庭や国家を平和に治めようとするもの、これが、「徳治主義」である。身を修めて「徳」によって政事を行うべき事、『論語』に次の様にみえる。

先生が言われた。「我が身が正しければ、命令しなくても、実行される。しかし、我が身が正しくなければ、命令してもは従われない。」

子曰。其身正。不令而行。其不正。雖令不従。「子路」十三ー六

先生が言われた。「政治を行うのに、人徳によっていけば、まるで北極星が自分の居場所にいて、多くの星々が北極星に向かって挨拶しているようなものだ。」

子曰。為政以徳。譬如北辰。居其所而衆星共之。「為政」二ー一

先生が言われた。「（人民を）導くのに法制をもってし、統治するのに刑罰をもってすれば、（人民は）法律の網をくぐり抜けて恥じることがない。道徳で導き、礼節で統制すれば、人民は道徳的羞恥心を持ち、身は正しくなる。」

子曰。道之以政。斉之以刑。民免而無恥。道之以徳。斉之以礼。有恥且格[14]。「為政」二―三

このように、「徳」のある人間が上に立つと、家庭や国家は平和に治まるというのが孔子の「徳治主義」である。この、修身から治国・平天下の連続性・等質性を端的に述べたのが、時代は降るが『礼記』の「大学」である。

昔、聖人の徳を世界に発揮しようとした者は、先だって国をよく治めた。その国を治めようとした人は、先だってその家を和合させた。その家を和合させようとした人は、先だってわが身をよく修めた。わが身をよく修めようとした人は、先だって自分の心を正した。自分の心を正そうとした人は、先だって自分の意念を誠実にした。自分の意念を誠実にしようとした人は、先だって自分の知能を十分におし極めた。知能をおし極めるには、物事について確かめる事だ。

物事が確かめられてこそ、はじめて知能がおし極められる。知能がおし極められてこそ、意念が誠実となる。意念が誠実となってこそ、はじめて心が正しくなる。心が正しくなってこそ、一身がよく修まる。一身がよく修ってこそ、はじめて家が和合する。家が和合してこそ、はじめて国が治まる。国がよく治まってこそ、世界中が平安になる。

古之欲明明徳於天下者。先治其国。欲治其国者。先斉其家。欲斉其家者。先脩其身。欲脩其身者。先正其心。欲正其心者。先誠其意。欲誠其意者。先致其知。致知在格物。物格而后知至。知至而后意誠。意誠而后心正。心正而后身脩。身脩而后家斉。家斉而后国治。国治而后天下平。『礼記』「大学」

「格物。知至。意誠。心正。身脩。家斉。国治。天下平。」という修身から治国までが連続して捉えられているのが見て取れるであろう。

このような「徳治主義」であるが、その具体的方法は「礼治主義」「礼楽主義」ということになる。（儒家なので、「法令」によらない。）君主の「徳」と「礼楽」には密接な関係が存在するのである。つまり、「礼楽」は君主が作るものであり、「礼」とは、君主の「徳」が外に表れたものなのである。「徳」自体は外から見る事はできないのである。よって、「徳」により政事を行うという事は、実際は（その外見上）「礼楽」により政事を行う、と言うことを意味するのである。徳（仁）と礼の密接な関係が存在すること、『論語』の以下の発言に見える通りである。

顔淵が仁について質問した。先生は言われた。「我が身を慎んで、礼に戻るのが仁ということだ。一日でも身を慎んで礼に立ち返ることができれば、世界中がその仁になつくようになる。仁を行うのは自分次第だ。どうして人だのみできよう。」顔淵がさらに質問をした。「どうか、要点を教えてください。」先生は言われた。「礼に外れたことは見ず、礼に外れたことは聞かず、礼に外れたことは言わず、礼に外れたことはしないことだ。」顔淵が言った。「私はおろかではありますが、このお言葉を実行させて頂きます。」

顔淵問仁。子曰。克己復礼為仁。一日克己復礼。天下帰仁焉。為仁由己。而由人乎哉。顔淵曰。請問其目。子曰。非礼勿視。非礼勿聴。非礼勿言。非礼勿動。顔淵曰。回雖不敏。請事斯語矣。「顔淵」十二―一

儒家では「徳」と「礼」による支配を考えている。というより、「徳」と「礼」による支配を考えるのが儒家であり、「法」支配を考えるのが法家である、と言えよう。儒家にとっては「法」はある場合には必要ではあるけれど、二番目に位置する手段であって「徳治」を補助する道具に過ぎないという立場である。そして、「徳」というのは、「人徳」という語で表されるように、「人格的感化力」と定義することができる個人的能力である。西洋倫理学の価値で言えば同じ「徳」という語で表現するこ事ができる。

ここでは、『論語』の言う「徳」という語の意味する内容とともに、人間理解の鍵は「徳」という概念であると考え、「徳」という考え方で人間関係を構築し、さらに「徳」によって政治的支配を実践しようと試みたのが、孔子を祖とする儒家であったことを理解させたい。

「礼」も重要な概念であるが、「礼」そのものは日本に伝来しておらず、一般的に理解が困難な事から、公民科教育としては深く取り上げない方が賢明だと思われる。

○宗教思想

最後に、孔子は人間ではない神秘的存在についてどのように捉えていたのかについて見てみよう。まず、「鬼神」について『論語』では次のように見えている。

樊遅が知について尋ねた。先生は言われた。「人としての正しい道に励み、神霊には大切にしながらも遠ざけておくようにする。これが知と言うことである。」仁についても質問した。先生は言われた。「仁者は、難しい問題を最初に片付けて、利益は後の事にする。それが仁と言えることだ。」

樊遅問知。子曰。務民之義。敬鬼神而遠之。可謂知矣。問仁。曰。仁者先難而後獲。可謂仁矣。「雍也」六ー二十二

季路が死者の霊魂へのお仕え方を聞いた。先生が言われた。「生きている人に仕えることもできないのに、どうして死者の霊魂などに仕えられよう。」死について質問した。先生は言われた。「まだ生について分からないのに、どうして死について分かろうか。」

季路問事鬼神。子曰。未能事人。焉能事鬼。敢問死。曰。未知生。焉知死。「先進」十一ー十二

先生は、怪異と力業と無秩序と神秘的な事は口にされなかった。

子不語怪。力。乱。神。「述而」七ー二十

ここに見える様に、孔子は鬼神（祖先の神霊や死人の霊魂）などの神秘的存在については話さない。存在そのものとして尊重しているが、その存在は分からないものとして、正面切って取り上げる事はしていないのである。また、死後の世界についても、過去も未来も同様に語る事はしないのである。当時の中国は、まだ人間と神々とが同居している感があった。その時代にあって、鬼神などの神秘的な存在を持ち出して道を説くことを嫌った為であろうと考えられている。つまり、鬼神などの禍福を持ち出して、功利的に道徳を勧める態度を拒否したためと考えられている。つまり、孔子は人間の中だけで道徳を説く方法を選んだと言う事であり、それは当時としてはかなりの合理的傾向が見える態度といえる。

次にもう一つ、「天」について見る事にしよう。孔子の「天」について

の発言は、次の様に見える。

先生が言われた。「私を知ってくれる者はいないね。」。子貢が言った。「どうして先生を知ってくれるものがいないのですか。」先生が言われた。「天を恨まず、人をとがめることはない。手近な事を学んで、高遠な事に通じていく。私を知ってくれるものは、やはり天であろう。」

子曰。莫我知也夫。子貢曰。何為其莫知子也。子曰。不怨天。不尤人。下学而上達。知我者。其天乎。「憲問」十四ー三十六

王孫賈が尋ねて言った。「部屋の奥の神の機嫌を取るより、竈の神の機嫌を取れという諺はどういう事です？」。先生は言われた。「そうではない。（至高の）天に対して罪を犯したならば、どこにも祈りようはないのです。」

王孫賈問曰。与其媚於奥。寧媚於竈。何謂。子曰。不然。獲罪於天。無所祷也。「八佾」三ー十三

ここに見える天とは、現在我々が考える青空としての「天」ではなく、知識と意思を持つ人格神であると考えなくてはならないのは明らかであろう。孔子は、「天」に対して畏れや尊敬を懐いている事、これらの発言から感じられるであろう。以下に引く「天命」や「天道」という言葉も、同様である。則ち「天命」とは、「天」がある人に下した命令を、天より授かったと自覚する事。「天道」とは、「天」が人に下す吉凶の事なのである。いずれも人格神の存在が前提になっており、一神教の傾向がある言葉であり、有神論・宗教的意義を持つ言葉なのである。

先生が言われた。「私は十五歳で学問に志し、三十で独立し、四十で迷いがなくなり、五十で天命をわきまえ、六十で人の言葉が素直に聞けるようになり、七十で自分の思うままに行動しても、道をはずれないようになった。」

子曰。吾十有五而志于学。三十而立。四十而不惑。五十而知天命。六十而耳順。七十而従心所欲。不踰矩。「為政」二ー四

先生が言われた。「君子には三つの畏れがある。天命を畏れ、大人を畏れ、聖人の言葉を畏れる。小人は天命を知らないで畏れず、大人になれなれしくし、聖人の言葉を馬鹿にする。」

孔子曰。君子有三畏。畏天命。畏大人。畏聖人之言。小人不知天命而不畏也。狎大人。侮聖人之言。「季氏」十六ー八

子貢が言った。「先生の文化についての考え方は聞くことができる。しかし、先生が人間の本性と天の道理についておっしゃることは、聞くことが出来ない。」

子貢曰。夫子之文章。可得而聞也。夫子之言性与天道。不可得而聞也。「公冶長」五ー十三

以上見てきたように、孔子の場合「鬼神」という考えについては、不可知主義を取り、分からないものは言及しないという理知的態度、合理主義精神が見える。この精神は時代的背景を考えると先進的といえるだろう。孔子の典型的な主知主義的態度は、以下のような言葉に見る事ができるだろう。

先生が言われた。「子路（由）よ、お前に知るということについて教えよう。知っていることを知っていることとして、知らないことは知らないこととする。それが知るということである。」

子曰。由。誨女知之乎。知之爲知之。不知爲不知。是知也。「為政」二ー十七

一方、「天」については、人格神としての性格が濃厚に残っており、有神論的・宗教的傾向が見えている。「鬼神」に対する合理的態度と考え合わせると、両者に対する態度は、矛盾している面が見える。殷代から続く天帝の権威の影響が絶大であった証拠というべきか、また時代の影響が払拭されていないと言うべきであろうか。人間はそれほど合理的に矛盾なく思想を構築できる訳ではないという証左と言えるかもしれない。

ここでは孔子の宗教思想について見てきた。孔子の宗教（神秘的存在）に対する態度は、倫理学的価値で言うなら「知」という事になろう。授業を行う際には、孔子の宗教思想について、合理主義的宗教観の持ち主であったと一応は言うことができよう。しかし、「天」については一神教的・呪術的要素が濃厚に見られる。完全に合理主義・主知主義的宗教観と言いきる事は難しいだろう。このように、人間の思想は、それ程截然と一つに割り切れる訳ではない。矛盾を含む存在であると教授するのは、高校生とっては早いかもしれないが、これからの自己探求に於ては無益なことではないだろう。

おわりに

以上『論語』に見える孔子の思想について「黄金律」「仁」「政治思想」「宗教思想」の四点から見てきた。これらは倫理的視点から言えば、「黄金律」「愛」「徳」「知」と言うことができるだろう。しかし、西洋の倫理的意味とは異なって、中国独自の内容を持っているのも事実である。高校生に授業を行う際には、このように西洋倫理学と同じような意味ではありながら、中国独自の内容を持つ『論語』の特徴を十分理解して授業を行うことが重要であろう。

注

[1] 『論語』の訳注は数多く公刊されているが、手軽に見る事ができるものに、次のようなものがある。本稿では、これら訳注を適宜参照した。

『論語』　金谷　治　岩波文庫　一九六三　一九九九改版
『論語』　貝塚茂樹　中公文庫　一九七三
『論語』　木村英一　講談社文庫　一九七五
『論語』　吉川幸次郎　中国古典選　朝日新聞社　一九七八
『論語』　加地伸行　講談社学術文庫　二〇〇四

[2] 孔子の思想を概観するには、以下に挙げるような概説書が有用である。

狩野直喜　『中国哲学史』　岩波書店　一九五三
小島祐馬　『中国思想史』　創文社　一九六八
日原利国編　『中国思想史』（上下）　ぺりかん社　一九八七

[3] 「四教」といい、少し異なる言い方をする場合も見られる。
先生は四つのことを教えてくださった。それは、文・行・忠・信である。
子以四教、文行忠信。「述而」七―二十四

[4] 市内日置江にある且格小学校の名前の由来である。